

## 松島先生との思い出

山田 恵子

わたしが初めて松島先生と話したのは副査をご担当いただいた卒業論文の口述試験のときでしたが、とても物腰がやわらかく静かな印象を受けました。事務室で働くようになって少し驚いたのは、先生は実はとてもお話好きで、特にご研究分野については熱く語る方だということでした。お時間のあるときにはよく事務室にお立ち寄りになり、ニュースの話題から英文学についてまで、本当に多くのことをお話しくさしました。話が広がると、「この言葉の意味は知っていますか」などと尋ねられることもあり、わたしが答えられずにいると、先生自ら分厚い広辞苑を引いては詳しく教えてくださいました。出来の悪い生徒でしたが、まるで学生時代に戻って先生の授業を受けさせていただいているようで、つい仕事も忘れて夢中になってしまうことも度々ありました。松島先生のような先生にあたたかく見守っていただきながら社会人生活をスタートできたことを、とても感謝しています。

また、学問についてだけでなく学科・専攻についても様々なことを覚えておいで、事務室内での古い資料について質問すると、いつも驚くほどにするすると「そのときは、こういう経緯がありまして」とお答えくださいました。

ゼミの授業などは個人研究室で行われていたこともあり特に学生との距離が近く、最後の授業後に全員で記念写真を撮っていたときの和気あいあいとした様子が印象的でした。ゼミ生ならずとも先生の授業は印象深いものが多かったようで、先生がご退職されることを同期の友人たちに話したところ、先生に教わった詩の一節を誦じてくれました。1年生のときの講読の授業で、暗唱を課題に出されたそうです。卒業してから時間を経てもなお心に残る詩があることを、少し羨ましく感じました。手書きのレポートもまた、先生の授業ならではの思い出のようでした。

退職記念品のご希望をうかがうと、書道を始めるとのことで書道具を希望されました。ご専門の英詩などを書かれるとのことでした。ぜひまた目白まで足を運んでいただき、作品を見せていただくのを楽しみにしております。

(英語英米文化学科研究室副手)